

A・MUSEUM

vol.88
[2016.9.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



モロッコから産出したアンモナイトの群集化石

(提供 : Escullié François)

アンモナイトの魅力

アンモナイトと聞くと、多くの人がすぐに平面渦巻き状の形を思い浮かべるかもしれませんが、茨城県ひたちなか市から産出した「ディディモセラス」は円筒形で巻きがほどけたような独特の形をしています。最初に発見されたときには多くの研究者が奇形個体であると考えましたが、一見不規則に見える巻き方にも種によっては一定の成長法則が見出されるようになり、数値計算で巻き方を再現できることが分かりました。このようなことからアンモナイトが多様な形に進化したことが分かります。

2017年2月から開催する企画展では、生物としてのアンモナイトの姿や、日本だけでなく世界のさまざまな産地のアンモナイト化石を紹介していきます。楽しみにお待ちください。(教育課 相田裕介)



茨城県ひたちなか市で発見された異常巻きアンモナイト「ディディモセラス」
(白線内がアンモナイト化石)

第67回
企画展

よそ
外から運ばれて来た生き物たち -Youはどうして日本へ?-
Artificially Introduced Species - What Brought You to Japan? -

アメリカザリガニ、ウシガエル、ミシシippアカミミガメ、アライグマ、これらの生き物は外国から持ち込まれ、本来日本にはいるはずのなかった「外来生物(外来種)」です。およそ30年前、私が子どものころ、用水路にはあたり前のようにアメリカザリガニとブルーギルがいて、これらを釣って遊んでいました。当時、私に外来生物という考え方はありませんでしたし、両親や学校の先生にそれらが外来生物として問題を起こす生き物であることを正しく教わった覚えもありません。現在の子供たちも、アメリカザリガニやウシガエルを日本の在来種として捉えている子は少ないのかもしれませんが。みなさんは、「外来種とは何か?」「外来種にはどんな生き物がいるか?」「どのような問題があり、対策が行われているか?」を知っていますか。

外来生物は、生態系や産業、人への被害をもたらすおそれがあるとされています。現在、その対策の必要性が盛んに訴えられており、法令による規制、自治体や市民による防除活動などが行われています。しかし、これらの問題は、一部の研究者や市民が対策をすれば解決できるものではありません。それは、外来種

は人の手により生じるものであり、みなさん自身も外来種を生みだしてしまう存在になりかねないからです。

本企画展では、個々の外来種について持ち込まれた経緯や問題点、本県における外来種の最新の知見や対策について紹介します。また、国が定める外来生物法によって規制される外来種やその取り扱い、市民が行っている活動についても取り上げます。まずは外来生物について、きちんと知ることからはじめて、自分には何ができるかを考える機会としていただければ幸いです。
(資料課 中川裕喜)

- 展示構成
- 第1部 連れてこられた私たち
 - 第2部 外来種の現状と茨城県の課題
 - ① 哺乳類
 - ② 鳥類
 - ③ 昆虫類
 - ④ その他の無脊椎動物
 - ⑤ 魚類
 - ⑥ 爬虫・両生類
 - ⑦ 植物
 - ⑧ 小笠原の外来種問題
 - ⑨ 日本から渡った生き物たち
 - 第3部 外来種を見つけよう
 - 第4部 外来種への対策とその必要性



アライグマ



ツマアカスズメバチ



(撮影：上野高敏) ワニガメ

会期 2016年10月8日(土)
~2017年1月29日(日)

10月8日(土)は午後1時からの公開となります。
開館時間 9:30~17:00 (入館は16:30まで)
休館日 毎週月曜日
※10月10日(月)、1月9日(月)は開館し、翌日が休館となります。
※1月2日(月)、1月3日(火)は開館します。
12月28日(水)~1月1日(日)は休館となります。

●自然観察会 外から来た植物を観察しよう

日時：10月16日(日)10:00~12:00
場所：博物館野外及び菅生沼(博物館集合)
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：30名(事前申込み・抽選)

●自然観察会 とんぼの池の池干し大作戦

日時：11月19日(土)13:00~15:00

場所：博物館内
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：100名(事前申込み・抽選)

●自然講座 歌でわかる「私たちの暮らしと外来生物」

日時：11月20日(日)13:30~15:30
講師：伊藤健二氏・吉村泰幸氏・芝池博幸氏
楠本良延氏・江川知花氏(農業環境変動研究センター)

場所：博物館内
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：30名(事前申込み・先着順)

●自然講座 外来生物シンポジウム-外来生物の現状と課題-

日時：12月3日(土)13:00~15:00
講師：五箇公一氏(国立環境研究所)
中井克樹氏(滋賀県琵琶湖環境部・滋賀県立琵琶湖博物館)
山田文雄氏(森林総合研究所)

場所：博物館内
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：270名(事前申込み・先着順)

来館者アンケート②

博物館の広聴活動 2

今回は、「A・MUSEUM」vol.87に引き続き、来館者アンケートの分析についてご報告します。

○来館回数

開館からの10年間で「初めて」の来館者が徐々に減少し、平成17年度に約30%となり、その後は、概ね20~30%で推移しています。裏を返せば、70%以上がリピーターというのが最近の傾向です。

また、ここ数年は来館回数5回以上が40%以上を占めることもあります。当館の傾向として、いかにリピーターの占める割合が多くなっているかを示しています。

○再来館する理由

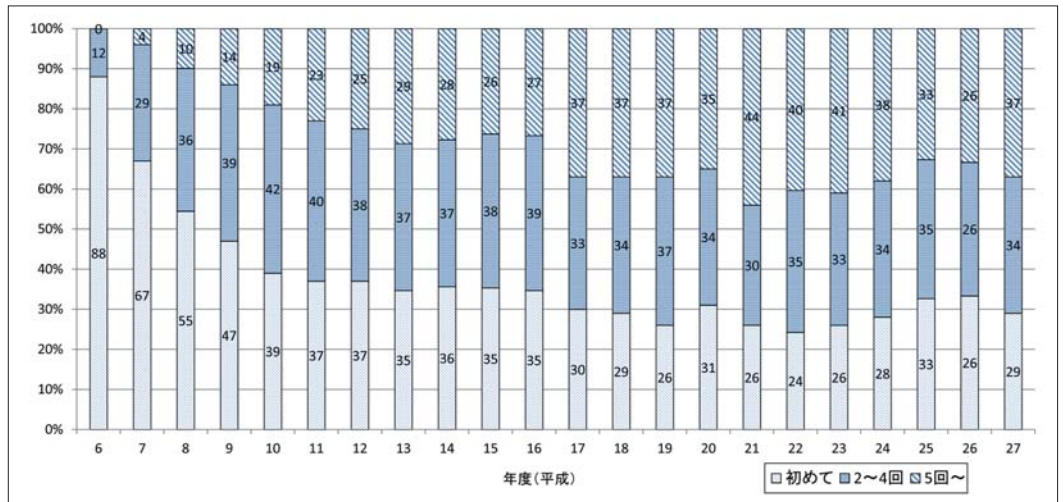
平成17年度以降の傾向を見てみると、平成26年度までの10年間の平均で「館内展示室（常設展）」が33.2%、「企画展」が28.8%、「野外施設」が22.5%、「博物館活動への参加」が8.5%となっています。1回の来館では見きれなかった常設展を見るための再来館が多くなっていますが、企画展を見るための再来館もほぼ同数となっており、企画展目的が常設展目的を上回った年度もあります。開館以来、当館において重点事業として取り組んでいる企画展の開催がリピーターの確保に大きな要因となっていることがうかがえます。さらに、当館の最も大きな特徴である充実した野外施設の魅力もまた、再来館する大きな要因となっていると考えられます。今後

外施設の3つをバランスよく整備していく必要があると考えられます。

○博物館での滞在時間

アンケートでは、入館時刻と退館時刻を答えてもらうことにより、来館者の滞在時間を調査しています。開館から平成11年度までは概ね2.5時間、平成12年度以降は概ね3.0時間となっています。また、20年間を通して滞在時間「2時間~2.5時間」が最も多くなっています。さらに、平成12年度以降では滞在時間「5時間以上」の割合が10%を超える年度が多くなっています。これより、リピーターが増加し、常設展や企画展を見学した後、館内だけでなく野外施設の利用も含めてゆっくりと1日を過ごす来館者が多くなっていることがうかがえます。

開館以来実施しているアンケート調査により、継続して客観的な来館者の意識と動向を把握するデータを蓄積してきました。今後も来館者のニーズに応えるべくアンケート調査を実施し、来館者へのサービス向上のために活用していきます。（企画課 沼尻耕一郎）



石の名前

植物、動物、化石や鉱物にはすべて名前があります。今までに見つからない新種には名前がつけられます。しかし、石の場合、はっきりと名前をつけられないことがあります。研究者が河原などで石の名前を聞かれると、人によって違った名前になってしまうことがしばしば起こります。

石は、火成岩と堆積岩、変成岩の3つに大きく分類されます。さらに分類しようとすると、石の多くは、

その基準となる化学組成、鉱物の量比などが連続しているために名前がつけにくくなります。最も困難なものは、少し変成作用を受けた凝灰岩です。これは火山灰が固まった堆積岩ではありますが、マグマ起源の粒子でできているために、火成岩に近い側面をもっています。また、変成作用を受けているので変成岩ということもできます。石の世界は複数の分類の性質をもっており、とてもややこしいものです。

館長コラム by director YOKOYAMA



イラスト：小泉美絵（ミュージアムコンパニオン）

つたの森で見つかった変形菌の正体は？

研究報告 1

雨上がりに、当館野外の雑木林を歩くと、落ち葉や朽ち木の上にさまざまな種類の^{へんけい}変形菌を見ることができます。とくに、つたの森は、多くの変形菌が見つかるよいスポットです。変形菌は、アメーバ動物のなかまで、変形体とよばれる色鮮やかな大型のアメーバとして動いたり、子実体とよばれる、胞子がたくさんつまった小さなきのこのようなものをつくったりする生き物です。条件がよいときには、つたの森を10分ほど歩くだけで、大きさが1~2mmほどの小さな変形菌の子実体が5~6種類見つかることもあります。

その中に、ときどき変わったものが見つかることがあります。一昨年の秋、つたの森を調査中、朽ち木の表面に黄色が鮮やかなへびヌカホコリが見つかりました。へびヌカホコリ *Hemitrichia serpula* は、網状の子実体をつくるため、遠目に見ると、黄色い迷路のようです。変形菌を同定するためには、胞子の表面構造や、細毛体とよばれる糸状の構造など、細かいところを観察する必要があります。へびヌカホコリはその独特な子実体の形から、顕微鏡を使わなくてもそれと分かり、一度見たら忘れられない変形菌のひとつです。

へびヌカホコリの細毛体を、顕微鏡で400倍程度に拡大して観察すると、3~4本のらせん模様と、細い

とげがびっしり生えているようすが見られます。今回もそれを期待して顕微鏡をのぞきましたが、らせん模様は見えるものの、とげらしいとげが見あたりません。細毛体の構造や胞子の表面構造は、ある程度安定した形質であるため、へびヌカホコリであれば、細毛体にとげが生えているというのが普通であり、そうでないならへびヌカホコリではないほかの変形菌である可能性があります。

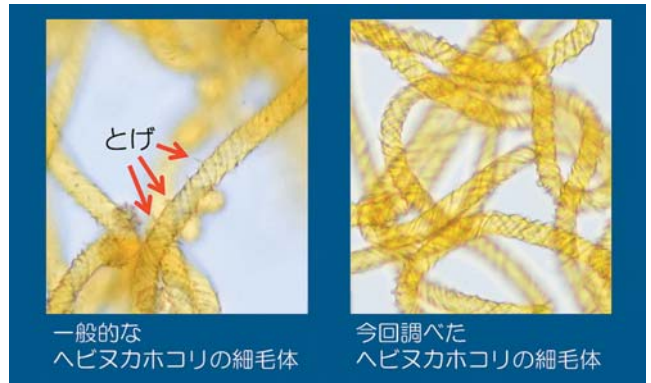
文献を調べてみると、細毛体にとげがない、へびヌカホコリの変種 *Hemitrichia serpula* var. *tubiglabra* が見つかることがわかりました。しかし、この種はネパールで見ついているものの、日本国内ではほとんど報告されていない変形菌です。現在、茨城県産変形菌リストを作成するにあたり、外部の研究者にも同定を依頼しているところです。茨城県産変形菌リストに、興味深い種が1つ加わるかどうか、結果が待たれます。

このように、変形菌の世界は、まだまだ分からないことがたくさんあります。それが変形菌の魅力のひとつでもあります。みなさんも落ち葉や朽ち木に顔を近づけて、変形菌の不思議な世界をのぞいてみませんか。思わぬ大発見にめぐりあえるかもしれませんよ。

(資料課 宮本卓也)



とげが見あたらないへびヌカホコリと考えられる変形菌



細毛体の顕微鏡写真

ヤモリとイモリはどこが違う？

皆さんは、ヤモリとイモリをご存じですか。この2種類の動物は、名前も外見も似ているため間違えられやすいのですが、名前の由来に目を向けると違いが分かります。ヤモリは民家の近くに住む爬虫類で、夜になると明かりの近くに集まる虫を食べに現れます。家の壁やガラス窓をパタパタと歩き回る姿と、害虫を食べてくれると考えられたことから「家を守る」動物で「家守」とされました。

一方、イモリは井戸など水中を住みかとする両生類で、「井戸を守る」という意味から「井守」の名前がつけられました。田んぼや用水路などにも住んでおり、稲につく害虫を食べることから、益虫とされています。

これらの動物は、現在博物館のディスカバリープレイスで見ることができます。陸上と水中に住む2種類の違いを皆さんも一緒に見比べてみませんか。

(ミュージアムコンパニオン 戸島咲子)

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—



ニホンヤモリ



アカハライモリ

阿見町島津から産出したマグロの椎体化石

研究報告 2

茨城県霞ヶ浦周辺に分布する、古東京湾の海底に堆積した下総層群※は、貝化石が密集する層を含み、数多くの化石を得ることが容易です。そのため当館では阿見町島津に分布する下総層群から、野外「古代の広場」での体験学習用に貝化石を含む堆積物を定期的に採集、保管、入れ替えを行っています。

2014年7月、中学生の職場体験学習の一環で、これらの堆積物から貝化石を採集する実習を行っていたところ、変わった骨の化石1点が実習に参加していた生徒の1人によって発見されました。発見時には表面に砂が付着していましたが、円筒状の形状から硬骨魚類の椎体化石と推定されました。

発見された化石は、長さが50.3mm、幅37.0mm、高さ39.1mmの大型の椎骨です。この化石は、血管棘の基部が椎体の前方にあること、椎体下孔が見られないこと、外側面の前部に突起が見られることから尾椎の前方の椎体であると考えられます。国立科学博物館所蔵のビンナガ、クロマグロ、クロマグロまたはメバチ（どちらかは同定が完了していない標本）、当館所蔵のメバチの椎体と比較したところ、今回の化石は、関節面や関節突起の形状から、クロマグロまたはメバチの椎体と考えられました。しかし、保存されている部位

が椎体の一部のみであることから、種まで確定することは困難なため、結論はマグロ属の一種としました。

日本のマグロ属の化石については中新統以降から産出しており、長野県安曇野市の中新統別所累層、北海道稚内市の中新統・鮮新統声間層、石川県金沢市の更新統大桑層から報告されています。

現生のクロマグロ、メバチ、ビンナガの分布域は北太平洋地域において広く分布しており、特にこの中ではクロマグロがアラスカ沿岸部など高緯度地域にも分布しています。今回の化石はマグロ属の中でもクロマグロまたはメバチの可能性が高いと考えられますが、両現生種とも太平洋の日本沿岸域にも広く分布が認められます。

今回の化石の発見は、遅くとも更新世中期にはマグロ属が既に太平洋日本沿岸域に分布を広げていた可能性を示すこととなります。しかし、日本では太平洋地域における更新世のマグロ化石の報告はこれまでにありません。マグロ属の時空分布の変遷を理解するために、今後もさらに他地域におけるマグロ属化石の報告が望まれます。

(教育課 相田裕介)

※下総層群…第四紀更新世中期から後期にかけて(約45万～8万年前)堆積した地層



産出したマグロ属の椎体化石



北太平洋地域におけるマグロ属の分布域

博物館生まれ！博物館育ち！

第3展示室の円柱水槽では、アカハライモリを展示しています。3月下旬から産卵がはじまり、水草に直径5mmほどの卵が多く産みつけられているのを発見しました。

そして4月17日、卵の1つから幼生が孵化しました。幼生の段階では、外鰓とよばれる鰓がついており外見はまるでメキシコサラマンダー(通称：ウーパールーパー)のようで非常に可愛い姿を見ることができました。

現在は、さらに成長した幼体の段階で、あまり水中には入らず、おもに陸上で生活しています。幼生の頃に見られた外鰓はなくなり、徐々に成体に近づいていくようすが分かります。

アカハライモリは、茨城県では準絶滅危惧種に指定されており、生息環境が悪化すると絶滅危惧種になる可能性がある動物です。私たち飼育員は、このような希少な生物の繁殖にも取り組んでいます。

おさかな通信

(水系担当 濱野恭之)



アカハライモリ幼生

茨城県の石

収蔵品紹介

「県の石」とは、私たちが生活する大地の歴史と成り立ちを知り、郷土の地質を愛する心を育むために、日本地質学会が企画して選定したものです。日本地質学会では、各都道府県についてそれぞれ代表する石（岩石・鉱物・化石）を一般公募し、その結果を参考に選定して、地質の日（5月10日）に発表しました。

この「県の石」は、地域の地質におけるその石の重要性や、地域文化や地場産業など人々の生活との関わり、学術的な重要性などを基準に選定されたようです。茨城県については、県の岩石として「花崗岩」が、県の鉱物として「リチア電気石」が、県の化石として「ステゴロフォドン」が選ばれました。

「花崗岩」は筑波山塊の主要部をつくる岩石です。稲田（笠間市）・真壁（桜川市）などでは古くから御影石として採掘され、この地域では日本有数の石材産業や地域に根ざした文化が育まれています。かつて地下

でマグマが固まってできた硬い岩石で、後に侵食を受けて関東平野に突出した山並みをつくり出しています。

「リチア電気石」は妙見山（常陸太田市）で見られるリチウムペグマタイトに含まれる鉱物の1つで、紅、青、緑などさまざまな色をした柱状結晶として産します。この鉱物はマグマが固まっていくときの残液にリチウム元素が濃集してできた、とても珍しい鉱物です。

「ステゴロフォドン」は、日本では約1700～1600万年前に生息していた、切歯（牙）を4本もつ古いゾウ類です。2011年に当館のジュニア学芸員が常陸大宮市で発見して大変話題となりました。この化石は切歯を含む頭部がほぼ完全に残っており、古いゾウ類の形態や進化などを知る上で、学術的に貴重な標本です。

当館では現在、「茨城県の石」を展示しています。この「県の石」の認定を機に、みなさんも郷土茨城の大地に目を向けてみませんか。（教育課 小池 渉）



茨城県の岩石「花崗岩」



茨城県の鉱物「リチア電気石」



茨城県の化石「ステゴロフォドン」

タンポポから考える外来種の問題

なるほど博物館

このコーナーは、自然に関するさまざまな情報を、わかりやすくお伝えするコーナーです。

春、空き地や公園などに黄色い花を一面に咲かせるタンポポ。日本には大きく分けて2つのグループのタンポポがあります。昔から日本にある在来タンポポと海外からもち込まれた外来タンポポです。在来タンポポは、花の色や花の裏側から包む緑色の部分（総苞）の形などの特徴によって、カントウタンポポやシロバナタンポポなど、約20種類に分類されています。一方、外来タンポポには、セイヨウタンポポやアカミタンポポがあり、明治時代にヨーロッパから種子を輸入し、野菜や牧草として栽培していたものが野生化して広まったといわれています。外来タンポポの花期は長く、受粉せずに種子ができる特徴があります。タンポポの花を包む総苞は内側の総苞内片と外側の総苞外片でつくられていますが、一般的に在来タンポポの総苞外片は反り返らず、外来タンポポの総苞外片は下向きに反り返っています。

近年、外来タンポポの花粉が一部の在来タンポポのめしべに受粉することによって生じた雑種が報告されています。雑種の総苞外片は中程度の反り返りを示し、

総苞外片の反り返り方だけでは外来タンポポなのか雑種なのかを正確には見分けられないことが分かりました。この雑種タンポポの出現のように、外来種は身近な自然に影響を及ぼしているのです。

第67回企画展「外から運ばれて来た生き物たちーYouはどうして日本へ？ー」では、セイヨウタンポポを含む海外から来た動植物をたくさん紹介します。ぜひ、ご覧いただき、人と自然環境の密接な関わりを考える機会にさせていただきたいと思います。

（資料課 豊島 文夫）



総苞外片が反り返らない

総苞外片が反り返る

カントウタンポポ（在来タンポポ）

セイヨウタンポポ（外来タンポポ）

トピックス

○ウッドデッキ・木道が新しくなりました！！

5月中旬から行っていた水の広場と花木の広場のウッドデッキとテーブル・イス，とんぼの池周遊木道の改修が7月に終了しました。

これらは，開館以来大規模な改修ができないまま老朽化が進んでいたため，床板が割れてしまったときなどは，博物館職員の手で部分的に補修を行ってききましたが，このたび全面的な改修を行いリニューアルすることができました。

使用している材料は，茨城県産の木材を環境に配慮した防腐処理を施しながら，自然博物館らしく自然の風合いを生かした加工をし，長く使用できるように工夫を凝らしています。

花木の広場でお弁当を食べ，とんぼの池での自然観察や，水の広場での水の流れの観察を楽しんでいただき，新しくなった施設で自然を肌で感じてください。

博物館の施設にはまだまだ修繕しなければならないところはありますが，これからも，少しでもみなさまに安心して楽しんでいただけるよう心がけていきたいと思えます。（管理課 近藤大介）



新しくなったウッドデッキとテーブル・イス

○動く恐竜の展示をリニューアルします！

第2展示室「恐竜たちの生活」コーナーの動く恐竜の展示を2017年3月にリニューアルします。新しい動く恐竜は，ティラノサウルスの成体，ティラノサウルスの幼体，トリケラトプスの成体の3体です。

リニューアル後のおもな変更点は，次のとおりです。

- ・ティラノサウルスが羽毛をまとった復元になる。
- ・恐竜の成長段階での形態の違いが明白になる。
- ・エアサーボシステムが導入され，いままでよりも滑らかな動作になる。
- ・白亜紀に花を咲かせた植物や，哺乳類の復元模型などを増やす。
- ・鳥類の進化，植物の進化，哺乳類の進化，恐竜の絶滅などの内容が補足される。

現在，リニューアルに向けてさまざまな企画を考えています。その1つとして，新しく設置される動く恐

竜のニックネームを10月23日まで募集しています。採用された方には賞状および賞品を差し上げる予定です。ぜひ応募してください。応募方法等の詳細は当館HPをご覧ください。（企画課 松浦卓也）



リニューアル後の恐竜の配置イメージ図

○茨城県版レッドデータブック<動物編>の刊行

レッドデータブック(RDB)とは，絶滅のおそれのある野生生物の情報をとりまとめた本のことです。1966年に国際自然保護連合(IUCN)が刊行したのがはじまりで，国内でも1991年に環境庁(現環境省)による全国版RDBが刊行され，その後各都道府県でも地域



刊行された茨城県版レッドデータブック<動物編>

版RDBが作成されています。本県でも，「茨城における絶滅のおそれのある野生生物」植物編(1997年)と動物編(2000年)がそれぞれ刊行され，2013年の植物編の改訂に続き，今年3月には動物編が改訂されました。今回の改訂では，昆虫や陸産貝類，汽水域の無脊椎動物なども多く掲載され，前回の263種を大きく上回る459種がレッドリスト種に選定されました。また，全国的に減少しているニホンウナギや，近年新種として記載されたツクバハコネサンショウウオなども加わりました。このRDBの改訂にあたっては，当館の職員が協力しただけでなく，当館に保管されている資料も多く活用されました。茨城県のウェブページでも公開されていますので，ぜひご覧いただき，茨城県の希少な野生動物の現状とその保全の必要性について理解を深めていただければと思います。

(資料課 池澤広美)

モンゴルフェスティバル



競馬

7月30日(土), 31日(日)に第66回企画展「モンゴル・ステップ・大草原－花と羊と遊牧民－」記念イベント「モンゴルフェスティバル－相撲と馬頭琴－」を開催しました。企画展ではモンゴルの大草原の自然とそこで暮らす遊牧民の生活や伝統文化を紹介しています。このイベントではモンゴルの伝統行事である「ナードム」を再現しました。



モンゴル相撲

や、独特の発声をするホーミー、オルティンドーとよばれるモンゴルの民謡を披露していただきました。

2日目は、モンゴル相撲のトーナメントを行いました。トーナメントでは、モンゴル式、中国内蒙古式の相撲が行われました。途中、にわか雨に見舞われながらも、白熱した戦いを繰り広げ優勝を飾ったのは、モンゴル式、内蒙古式の相撲ともにエンハタミルさんでした。

これらのイベントの開催は、実際にモンゴルの伝統文化に触れていただくよい機会になったと思います。出演者をはじめ関係者の皆様ありがとうございました。

(企画課 松浦卓也)



馬頭琴コンサート

1日目は、競馬と馬頭琴コンサートを開催しました。競馬では本物の馬が疾走し、その後エサやり体験や、乗馬体験も行いました。馬頭琴コンサートでは、日本で音楽活動をされているオットホンバイラさんとドルギオンさんに、モンゴルの伝統的な楽器・馬頭琴の演奏

編集後記

今年から国民の祝日となった「山の日」の8月11日、当館でも特別イベントが開催されました。高い山だけが山ではない・・・野外施設はいわば身近な「里山」です。木に登ったり、昆虫を観察したり・・・楽しい1日が自然に感謝する心の種になっていただけましたら幸いです。(S. M)

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - ＜鉄道・バスご利用の場合＞
 - 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テント等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注):()内は団体料金(20名以上)です。未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
 - 6月5日(環境の日)
 - 11月13日(茨城県民の日)
 - 3月20日(春分の日)
 - 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
- (ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※9月19日(月)、10月10日(月)、1月9日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※1月2日(月)、1月3日(火)は開館します。
- ※12月28日(水)～1月1日(日)は休館となります。

